
【差異の無い双六】 狂わせのペテン師

魚影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【差異の無い双六】 狂わせのペテン師

【Nコード】

N9308N

【作者名】

魚影

【あらすじ】

天才的なペテン師である少年『疾那』は何度でも裏切る。自身が閉じ込められたループする双六の盤上から抜け出す為、他者も仲間も駒にして。

撒周目 1話 (31話) 振れられない記憶(前書き)

彼は、その記憶に違和感を持っていた。日付が変わるその時から。

撒周目 1話 (31話) 振れられない記憶

「戻ってきた」

既に大した意味を成さない、数多に迎える流転の朝が再び更新されたというだけなのに、初めて僕の口を告いだのはこんな不可解な言葉だった。

押し寄せる困惑、いつも通りの朝として簡単に受け入れてはならないと啓示されたかのように、僕の頭は混濁して理解と拒絶を信号のように今尚繰り返している。

狂い踊る日常は回転し、反して冴え始めた頭はやがてここを幻と知る。

かく言うこの状況もついぞ穏やかに解消の途を辿ってゆき、残る浮遊間の後を引きつつも、僕は眼を振り開く。

一陣の風を感じる。臃げながら先と明らかに鮮度の違う世界、目覚まし時計のアラームが鳴り響く部屋でまさに今、僕は濁った虚夢から、落ち着かない現実へと回帰した。

何故か何かが擦れるような感触を残したままに。

こんな夢を見たのは僕が純粹に混乱しているからだろう。

無論原因は昨日までの冷やかな悪夢。

つまりは、ものの三日で自分の信じた誇りとも言うべき常識を一齐に、それこそ蟻の子を散らすように覆されていったのだ。

過程としてまさか今まで毛嫌いしてきた「子供らしさ」を己の体で存分に披露することになり、ましてや自分の衣食住に対して、一言も意見出来なかったなんて微塵にも信じられない。

拒絶にも似た自立をアピールすることで社会的な立ち位置を得て、大人としてみてもらおうとしていた以前の僕は幼稚だ、今はその愚かしさを恥じるばかり。

多分、悪夢の大元は僕のつまらない油断……人事だと達観しようとする幼い背伸びだ。

本当に達観していた親族達は、僕の父が単身赴任している内に母が離婚手続きを叩きつけ、ショックで父が自殺したという一連の事象を、『過ぎたこと』と一纏めにする能力を備えているのだろう。

だが僕は、離婚の兆しを数ヶ月前から察知しながらも、文字通り何もなかった。

そう。

離婚という近日中直に身に降りかかるであろう『悲劇』を、僕はシンプルな物語として捉え、己を騙し強がっていたのだ。

結果、唐突に訪れる父の死を、中途半端な予想をしていた僕は素直に受け入れる事を出来なくなった。

警察に事情を聞かされ戦慄した。寧ろ畏怖した。一番身近にいて、自分が一番分かっていているつもりだった人間が想像を遙かに上回る形で自分との縁を切った。

つまり世界はその程度で、誇れていた頭脳も個人の範疇に過ぎないということなのか。

……ばかばかしいな。

そしてこの非日常は僕という役者を弾き出して終演する。客観的

にみた無難な形で。

僕は自分の持つ些細な力を誇示し続けたせいで、大人には過大評価され見知らぬ街に一人置き去り。

これも報いなのか、可能性に気付いていながら誤解し行動をしなかった愚鈍な選択の末路だというのか。

それとも、気持ちをゆっくり整理する機会を与えられたと、無邪気に喜ぶべきなのかな？

時刻は既に9時を回っている。今日は新学校への転入手続きの日の筈だ。もつとも、もう間に合わないだろうが。

カーテンを閉めきった部屋で、一人考察し続ける。

そもそも、僕はなんと名乗ればいいのか。離婚したら父についていくつもりだったからそのままの姓か？ それとも保護者である母方の姓か？

そんなことも知らないのに、自己紹介も何も無いだろうさ。いや出来る訳、無いじゃないか。それなのに――

ボタンと乱暴に戸が開かれる音。

逃避を繰り返し自分を孤独に慰めている僕、この数日を繰り返し自己嫌悪を重ねる陰湿な男の住処が、今不意に外の世界と繋る。

「疾那^{しつな}、いるのか」

来訪者は僕のアパートのドアを開け放ち、野太い声を響かせた。思考を一瞬停止させる。そして対応しようと再び脳を酷使する。

――担任でも来たのか？ 転校初日から登校拒否をする僕を、職務として嫌々ながら迎えに来たのか？

いやそれより……疾那とは誰だ？

「メーター回ってるし、どうせ考えごとでもしてるんでしょ。最初

はあいつ堅かったからウジウジしてさ」

今度は女性の声だ。彼女も教職員なのか……にしてはやけに声が若い。まさか学生が？

ともかく彼らは「疾那」という人間を捜しているようだ。僕はきつと玄関口に向かって会話をすべきなのだろう。無論、決して気乗りしないが。

「どちら様です？」

僕は探るように、だが努めて明るい声で、戸の向こうに向かいながら話しかけた。

「あーつかぬ事を聞くが疾那。今、何周目だか分かるか？」

一方僕の問いには答えずに、僕には理解不能な質問を投げかける男の声。声色は端っから答えを期待していないような、或いは何かを警戒しているかのような面もちが感じられた。

「え？」

聞き返してみる。既に僕は玄関先まで来ていた。

部屋が暗かったせい、解放されたドアから射す陽の光に目が眩んだ。反射的に瞼が閉じられた後、もう一度ゆっくりと瞳を向ける。

「えっ？」

異質過ぎて、無意識に声が出た。

僕が彼らの姿を視界に入れた途端、それまで瞳に映っていた景色が吸い寄せられるようにぐにやりと歪む。

——その一瞬に何かが、何かが垣間見えた。

これは、大量の………血？

3人は言いただけ言うと即座に口を噤み、リーダーである私に決断を委ねた。

やはり大事なところは他人任せで、まだまだチームとしての結束力は甘い。仕方無いことなのだろうか。私は彼らの呆けたような表情をみて、ふとため息をもらす。

「悪意には悪意を、かぁ」

このチーム、『桜』は現在とても荒れている。

以前はプレイヤーの中で最もゴールに近かった私達だが、3周前に元リーダーが裏切り、一人であがってしまった。その代理として新たに仲間に加えた少年もまた、前周期……つまり昨日、私達を裏切ろうとしたのだ。

幸運にも二回目ともあって、彼がその計画を完成させる前に寸度で阻止することが出来ただけど……。

正直、もうみんな疲れてしまった。

同じ10日間を幾度も繰り返し、正解に辿り着けずまた死を迎える。

奇跡的に真相へ手が届く程の頭脳を持った人がこの街に迷い込み、チームとして活動して私達を導いてくれたけど、結局は裏切られる。共にゴールへ歩んではくれない。

賢いが故の恐怖。

双六は一人ずつしか上がれないから。

そう考えて彼らは孤独になる。

前例が無いだけでみんなが一番になれるかもしれないのに、試そうとはせず安全な道を進む。

利口なエゴイスト達が常に勝利する運に頼らないゲームで、駒た

る私達は敗者を演じ続ける。

でも私達4人は決して互いに裏切らない。
もしもソレが起こったのなら、このゲームは無差別な殺し合いになっってしまう。

それだけは……………避けたいんだよ。

悲観的な思考になってしまった、らしくない。

そろそろ気持ちの整理も済んだ筈。暫定的でも私はリーダーだから、全ての業も私が背負う。

「彼を利用しましょう。私達が勝つために」

私達は桜の花びらなんかじゃない。サイコロの目の如く、5人には中心が必要なのだ。

だけど今回は4人が囲む形。一人の賢者を愚者達が騙し利用し、終いに殺すのだ。何度でも。

立ち眩みなんだ。そうに違いない。

必死に己の無意識を弁解する。

だって僕は、

見ず知らずの人間に強烈な殺意を覚える訳が無いんだから。

そうさ、僕は変になってなんかいない。ショックで狂ったりなんかするもんか。目を瞑り1、2、3。ほら、僕は常識人だよ。鼓動も落ち着いてきている。

知らない内に膝を折って悶えていたようだ。見上げると二人の来

訪者が僕の様子をみて狼狽している。他人を困らせちゃいけない。困らせるのは自立が出来ない者の所為だ。汗を拭いながら立ち上がる。

二人とも学生だ。多分僕が行く学校の生徒だろう、大体想像はつき始めている。

「どちら様です？」

何事も無かったかのように笑顔を浮かべつつ、僕は質問を繰り返した。

「おい大丈夫か、まさか記憶……いや、頭でも痛むのか？」

あら、話が噛み合っていない。これは妥協が必要かな。きっと彼らは大きな目的の為にここを訪れ、結果を求めようとしているのだ。いわば調査みたいなもの？ 生じる利益は推量しがたいが、ここは協調した方が良さそうだ。これからこの街と付き合っていく為にも。

「いや、大丈夫ですよご心配なく。それであなた方は？」

もう三度目になるがもう一度訪ねる。相手の身分が分からなければ対応のしようもないから、執拗に。

「……………」

表情が強ばった。名乗るのにも相談が必要なのか？

僕に背を向けて密談を始める二人、よく見るとインカムで通信まです始めている。怪しいな。画すれば拉致られそうだ。

方針が決まったのか僕をキッと睨み、するりと手を伸ばす女性。

「一緒に来なさい」

「あれ？ 僕の予想当たった？」

時間が無い。

焦りは先行し、愚者を腐らせる。

僕は負けたくない。いや、負けさせられたくない。
得られるだけの情報を縫合して世界を創る。

不可能も全て詰め合わせて、そこには論理などいらないのだ。

持ち時間は彼らが目的地に辿り着くまで。幸い無言で歩いている
ので集中出来る。よし、早速始めようか。

1つ、僕の呼称は疾那。

2つ、彼らは4人以上のチーム。

3つ、彼らには時間が無い。

4つ、彼らは僕と親しい。

5つ、彼らには大きな目的がある。

6つ、……僕は、彼らを一人残らず殺したい。

以上だ、ははっ、殆ど意味が分からない。

辛うじて2、3、5は推理によって導き出したが、その他は予想
と感覚だ。全く以て理解に苦しむな、なかなかどうして面白いパズ
ルだよ。鳥肌立ってきた。

……まあ、次なるピースはすぐ手に入るんだろう。

目の前に、教室の戸が待ち受ている状況においてはね。

歩いて12分フラット。結構いい場所に住めたな、学校が近いの
は嬉しいよ。彼らが道無き道を通ってショートカットしたとしても
好調なタイムだ。ぐっすり寝坊出来そう。

「ここが俺たちの教室だ。……入るぞ」

「ああ、やっぱり君たち僕のクラスメイトだったんだ。よろしくね」
余裕を見せつける。無理強いされてもここまで従順についてきて

やっただ、これくらいの嫌みはいいだろ？

「蒼だ。よろしく」

女性の方が律儀に握手を求めてきた。おおやるね、握力めっちゃ強い。

ぬぐぐ、定石通り第一関節を砕き合って親睦を深めて僕らが争っている、無言で男子学生が2ステップ、距離を取る。

そして、吠えるような掛け声と共に、男は、ドアを、蹴破った。

ガラスが飛び散る音。悲鳴などは聞こえない。

わあぶっ飛んでるな。平常心でいられる自分が恐ろしい。もしかして前にもこんなことあったけかな？

遮蔽物が排除され教室が見えた。入った、と言うより見えたの方がこの場合正しいだろう。なんて下らない雑念を脳内で散らばらせていないと落ち着け無いくらい僕の視野は壮絶、だった。

机が8つしかない。

殺風景だな、なんて甘い感想は持てなかった。

中にいる人数は2人。

無論過疎化やら少子化やらのせいには出来なさそうだ。死体が

一つ。

そう、ここ。これが問題なんだ。

流石に考査で結論など出る筈も無く、許されるなら盛大に気絶をかましたいところなんだが。

まあ残念ながら女性の悲鳴なんて聞こえず、従って僕は日本人特有の協調意識で平常を装わなければならなくなった。

「おかえり、我らがチーム 桜へ」

「初めまして、お邪魔します」

なんか分かんないからボケてみる。

ふう、まさかこんな短期間の内に二度もキャパシティ超える事件
が起きるなんてね、運命って凄いな。

失敗は成功の元とか言うけど、不幸な事件の対応を失敗したこと
で得られるモノなんて教訓位じゃないか。それも今回使えるのは『
心が折れない気持ちの持ち方』のみだ。慰めにしかなくてねえ。僕
の感情は苦笑いで固定されているよ。

——とか。

実際現在こんな二ヒルに思考を繰り広げる事によって、僕はど
うにか慌てふためかず状況を享受している。

要は、これが僕の手に入れた新たな処世術って訳なのさ。まあ、
既に限界きてるけどね。

「疾那君は死体を見慣れてたりする？」

蒼さんとか言ったかな？ 一見優しげだけど前髪に隠れた眼光は
僕を射抜くように見つめている、そんなおっかない女学生はそう疾
那君に訪ねた。

4秒待ってみる。

.....。

誰も反応しない、やっぱり僕がその『疾那君』らしい。

「いえ、見たことなんてありませんし今この瞬間にでもぶっ倒れそ
うです」

「そうなの？ ああ、そう言えばお父さんの遺体も見れなかったら
しいわね」

「あれ、父の知り合いの方でしたか」

「うつん、あなたが以前言ったのよ？ 覚えてない？」

流石にもう流暢な思考など出来ず、がむしゃらに困惑を感情から排除しつつ僕は黙り込む。

また蒼さんは口を開いた。

「ともかく、復帰試験は無事合格よ。おめでとう。あ、皆もう喋っていいわよ」

彼女のその言葉で、ずっとどんよりとしていた、いや実際死体が放置されているから嫌でもどんよりとせざるを得ないのだが、それでもこの教室がパツと明るくなった気がした。

「お帰りツス」

「おかえりー」

「……おかえり」

あれ、僕はここにいてもいいの？ どっちかというとすぐさま出ていきたいくらいなんだが。

「あれ、分からない……どうなってるの？」

残念ながらお手上げた、こんな事態僕の水平思考でも対応出来ない。というか出題自体完成してないからこんなシチュエーションパズルは解ける筈が無い。

エクスクルーシブオアと自己完結審議の併用で導く僕の方程式とて、事実が歪曲されている場合全く以て意味を成さないのだ。工藤さん家の息子が出てくる推理マンガを前半5pで解ける能力も実戦ではあまり使えないんだな。

「じゃあじゃあ、疾那サンが困つてるところで正解発表ツスよ！」
ぴょーんバタッ。

こんな擬音が適してるのだろう。

ハキハキ喋るツインテ―る少女が突然僕の前に飛び出して来た――が、即座に伸びてきた腕に襟元を捕まれすところぶ。

腕の主は握力の強い蒼さんだった。

「まだこれはリーダーたる私の役目。というか、彼が一番心を許してるのは私なんだから適任でしょ？」

「何も言うな口閉じる息さえするな殴るよって言ったの蒼じゃん」
なんか内輪で揉め出した。

いやそれよりも正解だと？　こんな現実世界で向こうから正解を持つてくるなら、根本的に謎など必要では無いだ――まさか！　蒼さんはこれを復帰試験と呼んでた、もしかするとこの謎を意図的に作り出し僕の思考を支配したのはこいつらか！　大きな目的ってこれなのか！

「目の色が変わったねえ疾那君。だんだん掴んできた訳か、よく切れるおつむは健在のようだね。でも君の自己完結を待っていたら文字通り日が暮れそうだから、残念ながらこれで最終ヒントだよ」
蒼さんが嬉しそうに言葉を紡ぐ。

「昨日も、会ったよね？」

ああ、一見バラバラな全ての情報が同じ前提の上で真実性を発揮するとしたら？　思い出せ、今朝感じた違和感の正体を。可能性は二つ。オルタナティブから正しい因子を剥ぎ取るのだ。

「この世界は……」

蒼さんは一瞬口を噤む。僕が確信するのを待っている。

お陰で二者択一が絞られた。真実はついに輝きを魅せる。

両親の時のように解けずに腐るのは嫌だ、そう、これは二度目な

んだ！

大きく息を吸って目で合図をして、今宣言する。

「この世界は繰り返している！」

朝から僕に憑き纏う、違和感が吹き飛んでいくのを感じる。
声が、揃った。

「そう、繰り返しが起こっているんだよ。この街限定でね」

蒼さんはそう語ると、教室に置いてある揺り椅子を自分の元へ引きずってきてそこにどっぴりと腰を下ろした。

さっきの鋭さはもう感じない。責任を果たしてリラックスしているようにも見えた。

「リーダー様はおねむの時間みただから俺がイッテッ！！」

…俺が続きを話そう。」

蒼さん揺り椅子でタックルって、どうやってるんだろう？

「とにかくだ！俺達とお前は仲間だった。前周期、つか昨日までのことだな。あつ、俺の名前は桃也だ改めてよろしく。んで10日前、今日と同じようにここに引っ越してきたお前は本当に初めて俺達と出会った」

話し途中で自己紹介を挟んできた桃也という男は、教室内を歩きながら目線を僕に合わせないで説明をする。

「この街は双六だ。10日で1ゲーム、上がりのマスにゴールした者以外ふりだしに戻る、って書いてある変則ルールだな」

「ということは僕は前のゲームで負けて、ふりだしに戻った」記憶を失ったと言う訳か。じゃあ何故こいつらは僕の事を覚えてるんだ？ ゲームに勝ったのか？

「そのころもう何ゲームも繰り返していた俺達の中で、一人の勝者が出たんだ。そいつは俺達を出し抜き利用してそれどころかゴールする方法も教えずに消えやがった。とつても頭が良かったんだよ、奴は」

裏切られたのか、このチームは。

「それで、中核だった奴が抜けてしまい非常に困って俺達が3日を無駄に過ごしていたら、今まで話したことのない転校生がいきなり俺達の元へやってきて、こう言ったんだ」

桃也が勿体ぶっている。早く要点言えや、気になってんだぞ。

「この世界は繰り返しているのか？ って聞いてきたんズよ、疾那サンは3日目で事件の真相に気づいたんですよ！ スンゲーです！」
「わっ！ 白先に言うなよ！」

ツインテールが桃也の隙について、僕の前に飛び出して答えを先に言った。

「で、疾那サンとあたし達は協力して双六クリアを目指したんですよ。このゲームに勝者が出たとき、誰かが代わりに新しくこの街にやってくることになってるんス。疾那サンは元リーダーに代わるあたしらチームの『頭脳』だったんスよ」

そういうことか。この繰り返しているらしい双六の新しい駒として、僕は選ばれこの街にきたのか。となるともう疑問は一つきりだ。

「じゃあ、なんで僕は記憶を失って、またここに居るんだ？」
ギシッ。揺り椅子を軋ませ、蒼さんが立ち上がる。

「この世界でリセットを回避し記憶を保つには、人の死体を見る必要があるんだよ。君はそれを成さない内に殺された。だから繰り返ししてしまった」

蒼さんの口調には毒があつた。だがそれよりも重要なことがある。

「僕が殺された？ 誰に？」

部屋が静まった。僕と蒼さん以外は暗闇。さっきと同じ空気が漂う。

「分からない、としか言いようがない。君が死んでから私達も原因を探ったが、真相に辿り着く前に全滅してしまったよ」

「全滅？ どういう意味ですか」

蒼さんはスッと目を細め、鷹のような鋭さで僕の脳貫いた。

「疾那君、この街で起こっている双六の正体はね……………人殺しゲームなんだよ」

教室の後ろにある戸が引かれる音がしたが、僕は振り向く事が出ない。やがてゆっくりと足音が近づいてくる。

「君が疾那君かぁー。生きた姿では初めましてかな？ 死体の姿じゃ久しぶりだね」

動けない。僕の両足は床に張り付いている。

「挨拶とか自己紹介とか名刺交換とか？ そんなことをしたいのは山々なんだけど、生憎時間が無いらしいね」

足音はもうすぐ側で響いていた。

けれど僕の思考を占めるのは圧倒的な恐怖。

ひたすらに、怖 かった。

「そうそう残念だけど、ここで君の１ターン目はおしまいなんだよ」
耳元でそう囁かれた。

そして。

直後に襲う鈍い痛み。

首筋から伝う痺れる感覚と共に、視界は逆さに落っこちる

最後に見えたのは、一度も見たことのない男の赤い腕、それに滴る赤い血液、だった。

E N D

撒周目 1話 (31話) 振れられない記憶(後書き)

唐突ですが31話から始めました。

1話は随時割り込み更新していく予定です。

酷評でもめげないんで感想下さい！ 悪いところは全力で直します！

- T s h i e i

撒周目 2話 (32話) 解れ直し

「わおー、誰かと思えば疾那君じゃないか。前周はお世話になったね君のお陰で僕ら随分楽しんだよー。ま、もつとも君は」

「覚えていないんでしょうね。あーいいなー君たちは自身の罪も責任も簡単に忘れられてー。あたしらはそんなんずーっと背負ってるのよあー辛い辛い」

瓜四つの瞳が、僕の姿を捉えて闇夜に煌めいている。

そしてもう一度鳴り響く二つの銃声。その轟音を追いかける透き通った重声。

「「四つ」」

鈍い地響き、これは人がコンクリートに崩れ落ちる音だと知っている。途端に僕の生存本能が活発に動き出した。

「今日はあと一つつてとこかなー、姉さん」

「うん。でもここら辺に人はあんまり残ってないから、もう少しいけるかもねー、兄さん」

ふふふつ、と顔を合わせて笑う彼ら……。いや彼女らなのか？ 二人の優先順位が分からない。何せ僕には二人が完全に同じ個体に見えるのだから。……。気味が悪くなる程に。

夜一時過ぎ。気付いたら僕は既に自室にいて、布団を被り目を瞑っていた。俗に言う気絶、のような感じで。

瞼を開くと同時に跳ね上がり、ミオクロニーの過剰反応みたいな目覚めを迎えた僕は、寝ている間に増幅していた心の靄を晴らす為に、一瞬で着替えを済ませすぐさま外へ飛び出す。この閉塞され輪廻を模す街の、殺人ゲームなるものの真実をいち早く確かめたかったのだ。

電灯すら灯らない田舎町を彷徨う内に、突如付近から発砲音が聞こえ、走って駆けつけるとそこには三人の血を流す抜け殻が横たわり、側には金髪の少年少女が一丁ずつ S & a m p ; W M 3 7 (拳銃) を手に、無邪気に笑い声をあげる姿があった。

そして、声が止むと同時に振り向き、僕の名を呼んだのだ。

「ねえだんまりしてないで何か喋ってよ疾那君ー。あたしらは寂しがり屋なんだよー」

「そうさー今だって人殺しをして心が痛いってのに」

月光を反射し微かに光る髪を揺らしながら、二人は僕に近づく。ジリジリと、追い詰めるように。

心が痛むなんて嘘だ。笑顔でトリガーを引いていた癖に。そんな無邪気からの幼さという仮面を、僕は嫌悪する。

僕の目には、笑顔をつくることでどうにか本能から、殺人衝動から逃れているようにしか見えない。

しかし、ここに来てようやく殺人ゲームの意味を理解できた。

この街は時間的にも空間的にも閉じこめられていて、故に誰にも殺人を咎められることが無い。

ならば繰り返される殺戮が快楽に変わっていくのも時間の問題なのだろう。

つまりこの街の住人達は既に、限界まで狂っている。

殺すことに躊躇いなんて在る筈が無い。だって殺した相手は10日経てば平気な顔で生き返るのだ、死んだという記憶も無くして。

僕が殺されたのも同じ理由。僕の仲間だと言ったあの『桜』なんてグループも所詮僕の死には興味無かったんだ。

——そして今まさに死に逝こうとする僕にも、興味なんて無いんだ。

「僕を、ここで殺すのか？」

僕は声を絞り出した。背後には停車したトラック。巧く逃げられるか？

……いや無理だ。相手は子供と云えど、そこで殺されていた警察が所持していたであろう拳銃を右手に構えている。それに、奴らはもう4人殺しているんだ。

「ふふつ、疾那君にとっては僕らと初めての会話なのにー物騒だなー」

「殺すー？ 殺して欲しいのかーどうしよっかな、ああそうか君はもう」

「プレイヤーじゃ無くなったんだっけ。そーかそーかじゃあ殺しても構わないの」

「ねー。丁度一人足りなかったし生け贄にでもなって貰おうかー。ふふっ」

交互に会話している。きっと双子なんだろう、精神的に安定しているように見える。殺人に対する狂喜で幼い笑顔も歪んで、標的となった僕には双頭の悪魔に睨まれている気がした。

目が覚めてからあまり時間が経って無いせいか、事象に対する行動欲が、或いは体感する現実味に欠けていたのかもしれない。つまり正直に言って深夜、つまり二日目というターンの始めを僕は明確に記憶していない。

だからこれは僕の思い違いかもしれないのだが、その時僕が感じていたのは夜風が当たる清々しさと、他人事のような喪失感だけだったと思う。

そうやって恐らく呆けていた僕を、あの双子は面白そうに眺めつつ、照準を頭蓋に向けていたのだろう。

そして。

背後から忍び寄っていた、あの男が双子に襲いかかった。

「やあやああたしらに対して不意打ちとは愚かの極みだね、兄さん」
「他の四人が僕らを囲んでるよー。こいつらは・・・5つ目かあ」

「随分余裕なんだね。この人数差でも」

「勿論だよーそれにしても疾那くん。はははっ、愛されてるねー君は」

「全くお前らときたら・・・どんなときでも疾那疾那と」
「浅賀君！ 無駄話をしないで敵をしつかり見て！」

「おい疾那！ 大丈夫か？」

「桃也君は疾那君を保護して！ 私と浅賀君は・・・」

「思い出せるのはそこまで？」
「はい、すいません」

「謝らなくていいよ。君は一日とちょっとで死の危機まで晒されて

衰弱してたんだ。それに復帰試験の後だったし、脳も疲れていたんだろうね」

蒼さんは優しげにそう言うと、揺り椅子をギシリと軋ませて振り向いた。

彼女がそこで何をしたのか分からないが、彼女の後ろに控え強ばっていた彼らが途端に安堵する。

僕に向けられた疑惑の眼差しも、一人を除いて消えていった。

「しかし・・・自分でも情けないですよ、二度も気を失って皆さんに迷惑をかけるなんて」

8つしかない机の前に、今は6人が鎮座している。

無論ここは僕が昨日連れてこられた教室だ。といっても前見たときとは違いが二つ。見つけられるかな？ 答えは死体が無くなっているのと、代わりに布団が敷いてあることだ。ああ、何考えてんだ。

よく分かんないけど寝てたらしい、僕は。

目が覚めた時に蒼さんから事情を教えられたけど、不思議としつくりこない。嘘をつかれた気がする。不安だが、心は他に捕らわれて、心境すら動けない。感情が変わらない。点で固定されて、プロペラのように空回りしている。

「謎解きは・・・今日は無理そうね」

蒼さんがそんなことを言っていた気がする。

いや、言ったのは今か？ 僕はここで何をしている。どうして僕

は回っているんだ、中心はどこにあるんだ、中心は・・・

「はじめ!!?」

彼を仲間に引き入れたのは正解だった。

記憶を消せるのは実に使い勝手がいい。テストの時は愚か過ぎて心配になったが、実戦ではなかなか機転も利くし、ただ理解力が無いだけのようだ。

もう裏切るような人間はいらないから、『桜』は共にゴールする為に存在し誰にも利用されてはいけない。

「蒼、そっぴや浅賀はどこいったー?」

桃也君が気の抜けた声で私に尋ねてくる。というか正直私も彼が居なくなってたことに気づいておらず、改めて今オレンジ色に染まった町並みをぐるりと見回した。

「ああ浅賀なら少し前教室に忘れ物したーと言って消えたツスよ」
白も興味なさそうに、いわゆる業務連絡的な棒読みで答える。

正直しんどい。

今回もゴール方法が分からないし、いつにもまして結束力が無い。

その点において特に浅賀君は扱いづらく、前周と変わらず自由奔放。やっぱり前言撤回かな、失敗だったかな。

「教室に疾那君ってまだ居るんだっけ？」

あつ、それを忘れてた。

あのままのぶっ倒れた状態で疾那君が残っているのなら、忘れ物を取りに行く浅賀君と鉢合わせになる。

てか、まさかそれを故意に狙って！？

教室に浅賀がやってきた。

そういえば『桜』メンバーの中で唯一会話したことが無い人間だな。もしかしたら僕がふわふわしていた時世話になつたのかもしれないけど、記憶に残ってるのは……、あれ？ 特に無いや。

まあともかく十分くらい前から既に感情は穏やかで、ここにいても動きたくなかっただけだし、あまり気を向けずに彼を向かい入れた。

「疾那。どうして君が俺達の仲間なのか分かるか？」

僕が目の中の机に目を落していると、浅賀もまた教室の戸の方を見て、重々しく問いかけてきた。

「蒼さんは、頭脳が必要だって言っていたね」

そう。それ以上に価値を求めているような口ぶりだったことを覚えている。

「自分を誇っているんだね、君は」

「僕は迷惑しかけてないよ」

謙遜ではない、恥ずかしながら事実だ。

「その通りだよ!!」

「済まない……」

彼からは明らかに怒りが感じられる。

「君はこのチームに何をした!? 悪戯に情報と希望を与えて、自分の持ち駒にしようとしたじゃないか!」

浅賀は僕に反論させないつもりで畳みかけてくる。

「俺のことだって、繰り返しの事実を君から教えられた時は嬉しかったのに! 君は俺を選んで仲間にすると言ったが結局、利用しただけじゃないか!」

違う。それは今の僕だ。

「これは俺の復讐だ! 騙された者としての下剋上だ! 同じことをしてやると『桜』は息巻いていたんだ。それが今はどうなってる!?!」

僕の記憶が届かないところの話をしているのは明らかだ。

「それでも彼らは君を、疾那という人間を最大限に労わっている。もう既に君を許して仲間の状態に戻ったことに歡喜して……今度は俺を疎ましく感じだした！」

浅賀は教室の隅の一角を睨み、憎しみを全てぶつけている。そんなの僕に止められっこない。

「疾那に駒として扱われて、今は『桜』に障害物として思われている！ それも全てお前のせいだ！ 疾那！」

「僕が……何をしたって言うんだ！？」

「忘れたからって罪が消えると思うなよ！！」

息を大きく吸い込んで、浅賀は僕を見た。

「疾那。お前は、まさか本当に『死体を見ただけで記憶が持続する』と思っている訳じゃないよな？」

「どつという意味だ？」

僕の行動だ。3日で繰り返しに気付いたんだから死体を見ていない筈が無い。この返答は、保険だ。

「ははっ、やっぱり馬鹿だお前は！ その程度も分からないのに何が頭脳だ！」

浅賀は優越を感じて、若干さっきの勢いが消えている。それに、優越は人を油断させるのだ。

「ほら、これが本物の鍵だ。記憶を保って繰り返す為のな」

ポケットを探り、中のものを手に隠して僕に突き出す。

「この双六のプレイヤーたる資格、全体で21個しかない。俺はお前の分を貰った訳だ。ほおら、やるよ」

不意に浅賀はソレを前に放った。

放物線を描いて、僕の目の前に来て……。

ああ、綺麗なサイコロだった。ダイヤモンドで作られた、とても美麗な、そして僕の大事なものだ。

「どうだ？ あいつらからはこれに触れると記憶が戻るから絶対に渡すなと言われていたが……俺は馬鹿だから渡してしまったぜ」

ふふっ、本当に馬鹿だな。

「どうだ、お前が言う駒とやらに騙されて、さぞかしむかつくだろうなあ？」

馬鹿だな。

「さて、記憶が戻ったお前を俺はもう一度殺そう。しっかり屈辱を添えてな。これが……俺の復讐だ」

愚かしいな。滑稽なほどに。

「そうそう。もう一度殺すつてのはそのままの意味でな、お前は即死だったから気付かなかっただろうがお前を前周殺したのは――」

「少し黙れ。お前が僕を殺したのも、昨日今日と僕の記憶が飛ぶほど気絶させていたのも知っているんだよ、浅賀」

ああ、驚いてるなあ浅賀。急に頭の回転が速くなった俺に対して。

「記憶を無くしたと何故分かる!? 記憶が無いのに!」

「だからお前は馬鹿なんだよ浅賀。少し考えればそんなのすぐ分かるんだ、それどころかお前の行動もな」

今度は浅賀が黙る番だった。僕は非情に追い立てる。

「教科書通り動いてくれてありがとう。お陰で僕がすべきことにも狂いが無いよ」

「教科書通りだと?」

「そうさ。僕の、疾那のやるべき予定は、浅賀の削除だ」

僕はサイコロをポケットにしまい、両眼で彼を捉える。

「俺を殺すつてのか? 笑わせんな! 力量差も分からないのか頭でっかちの裏切り者が!」

右正門構え、連珠砲か? 浅賀もお得意な空手で応戦してくるらしい。滑稽だ。

「ああ。このひ弱な僕がお前を倒してやる。その方が燃えるだろ？」

僕は浅賀を挑発しながら、右膝をつく。

「何をするつもりか知らないが、お前に準備なんてさせると思ったかッー!!」

浅賀が、懷に飛び込んできた。

「最期まで馬鹿だったな。死亡フラグってのを知らないのか？ 奴は」

僕は独り言を、抜け殻に向かって吐いた。

硝煙を上げる、熱くなった拳銃を片手に。

「あの双子、ゲームを面白くする為にとって僕の左足に銃を仕込んでいてくれたんだな。後でお礼に行くか」

浅賀の死体をどうするかも、これからどうやって『桜』を騙していくかももう決めた。

そして、記憶が無い振りをして動くことが僕のペテンの鍵となる。

「それにしても、何が『俺の復讐』だ。全く」

作戦を決行する為教室を出る時、僕は彼を一瞥した。

「浅賀め……僕の台詞、取るなよ」

撒周目 2話 (32話) 解れ直し(後書き)

お気付きになられたかと思いますが、主人公、モロ悪役です。

R15入れた方がいいんですね？ 直接的な表現はしてないんですが…

次も1週間以内に更新したいと思いますので、是非お付き合いお願いします！

- T s h i e i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9308n/>

【差異の無い双六】 狂わせのペテン師

2010年10月11日02時43分発行